

墓がある。

史家のなかには善光寺僧等の教化業績を不当に過小評価するものもある。例えば高倉新一郎『新版アイヌ政策史』（昭四七）には次のようにいう。

「たとえ布教の効果はあったとしても、極小範圍に止まりしかもほとんど表面的なものにしか過ぎず、それが土人の精神界に与えた影響は極めて狭小であったと見ても差支えはないだろう」

だがこの論は前言の如く過小評価というものである。いま高倉氏の論を詳駁する紙数をもたないが、異宗教をきらうアイヌたちが、南無阿弥陀仏と念仏を称えていた事実は、看過できないものがある。

いまここでは有珠山の噴火にまつわる話題のみを紹介しておいたが、この他に特筆すべきアイヌ教化業績は非常に多い。

二世鷺洲も高德の人であった。筑前の人で、博多妙円寺に出家し、のち江戸小石川伝通院の賢州上人の門に入って学び、またかの有名な徳本行者の薫陶をうけ、文化三年（一八〇六）三十五歳のとき善光寺二世に迎えられた。仏寺に親しまぬアイヌたちに、

濁酒を与えて寺へ近づくの仏縁をつくり、同四年ロシア人がエトロフに侵入して蝦夷地が緊迫した空気に包まれたさい、たとえ敵の砲丸に当って倒れるとも、捕虜のはずかしめをうけてはならぬ」とアイヌたちを諭し、誓詞を作って一人一人に与え、仏旗を立てて土地を守備させた。文書伝道にも力を入れ、『後世の技折』という書をかき、

仏教福祉発展の意義

——過激派を対象として——

梶 原 重 道

（浄土宗善導大師遠忌事務局長）

転換期を迎えたということだが、マスコミを通じて流されてから、もう数年以上にものなる。

このことばは、もとより日本自体の物心両面にわたる転換を、意味していることは云うまでもない。

しかしこのことばの使用が、うすれてしまったと同じように、はたしてどれだけの転換がなされたであらうか。

『一枚起請文』をアイヌ語に訳して教えたりなどした。その行状は『徳本行者法弟小伝』にも「夷人の悦服振古その比を見ずとぞ」と記るされている。

これら先徳の業績を仰ぐにつけても、筆者などは、ただ自分の今日の至らなさを恥じるのみである。

あるいはこの転換期ということによって、全く一大転換をして影をひそめるのではなからうかと、かすかな期待をもったものに、過激派運動なるものがあつた。

しかし実際はそれどころか、この無差別的行動は激化した。

たとえば全学連の安田講堂事件から、連合赤軍の浅間山荘事件や、企業爆破の連続から、最近の成田空港事件への進行状態を

みても、転換したのはその激化への方途ではない。

もつともその間に、クアラランプール事件や、各地の銀行強盗事件、ピストル射殺事件等これらに類似する凶悪暴力の過激事件の続発による戦慄の衝撃は、むしろまたかといったギャング映画でもみるような、精神の慣れをさえ覚え始めたのである。

これらの事件が根絶されることなく、より組織的に、より効果的に、しかも頻発的に行われるのは、どうしてであろうかという素朴な疑問を抱いたまま、国民の不安は絶えなくなった。

法治国家といひながら、社会保安がどうなっているのだろうか、という疑心は決して一部のものではなくったのである。

いわゆる過激派が意図し、彼等を育くみ、彼等の集団を形成する組織や、母体は、いったい何であるのか、一向にわからないままに決してわれわれと無縁ではなくったことだけは事実である。

「窃盗、強盗など手段を選ばず軍資金を工面するM作戦・要人を誘拐して人質にするP作戦・人質は獄中の仲間の身柄と

交換させ、用意させた飛行機と一緒に中国に乗り込む。

一方、B作戦であらかじめ米国にも仲間を送りこんでおいて、一九七〇年秋には日米同時に武装蜂起して、その衝激で全世界の左翼を赤軍派の傘下に引き入れ、完全にオルグされた中国共産党、毛沢東らとともに世界第一の共産党と赤軍を形成して、米日が第三次世界大戦に入るに先立って、世界中で革命戦争を起し、中国軍にはソ連へ進攻させるという構想であります。

この発想はその背後にある『三プロック同時革命論』といわれる共産党独自の世界革命の戦略との関係で理解しなければなりません。」

私はこの一文をみて、あながち誇大妄想的で、狂気の沙汰とは思えない。事実その一部が絶えず実行されているからである。

さらにまた火炎ビンや、爆弾による集団行動なり、ダイナマイトを盗み、銃器の強奪や、交番の襲撃をはじめ、各地での銀行強盗など、しかもパレスチナゲリラとかかわりなど紙上に報道された事件を通じて

て、常に一貫した運動が展開されていることを感じさせられるではないか。

このような過激派なるものの思想系列や、構想、さらにその運動の組織化と、その資金源などのかかわりについては、私はただ「不思議」という他に何のもちあわせもない。

ともかく間断的であるにしても、台風のように忘れた頃、このような事件が繰り返されている現状を通じて、どうしてという疑惑と、不安がつのるのみである。

それにしても同じ人の子である彼等は、どうして幻想のようなこうした革命に、身を投じねばならなかったであろうか。

そしてまたこれらの過激派事件を通じて、法に対する不安な疑問をいだかずにはおれないということである。

この気持を更に深めたものは、何といっても彼等の裁判事件である。

マスコミは、弁護人ぬき裁判と称し、とくに弁護士会は大きくこれに反論した。新立法がめざす「法と秩序」とは？とか「治安強化」への危険な誘惑、などのタイ

トルで、「成田」「弁護士」「地震」立法の動きは一見バラバラで、それなりに大義名分も成り立つ。

しかし一つ一つ点検し、つなぎ合せると「法と秩序」の下で進められる「治安強化」の構図が透けてみえる。

あるいは「法の一人歩きで民主主義が台なしに……」などと、成田新法への反撃は強いのである。

いわゆる「弁護士ぬきの裁判」という宣伝が先行し、この新立法の真意は、われわれに容易に伝わらない。

たえられなくなったのか、ようやく法務省が「過激派の裁判を正常化し、法と裁判の信頼を守るために」というパンフレットを発行した。

しかし是れとても、きわめて限られた人にしかな渡っていない。

この小誌の一部「過激派の裁判はなぜ遅れるか。裁判制立そのものを否定する法廷闘争」という項目で、次のように訴えている。

「過激派の裁判が遅れる最大の理由は、この程事件の被告人等が現行憲法による

民主主義体制そのものを敵視し、裁判制度自体を否定し、法廷を政治闘争の場として無法の限りを尽くすことにあります。裁判官に対して、ばりさんぼうが投げつけられ、裁判長の指揮や制止を無視して、審理と本来無関係な政治的演説を続けるなど日常茶飯事です。

例えば沖縄返還協定批准阻止闘争事件等においては、被告人らが「裁判所には、我々を裁く資格がない」「この法廷はいわば戦場である」「裁判に従う意志はない」などとほばかることなく公言し、更には裁判官にスリッパや紙くず、梅干しの種等を投げつけ、「地獄に落とすてやる」などと暴言をはいています。しかし残念なことに、ごく一部ではあります。被告人らのこのような法廷闘争に手をかす弁護士がいるのです。

例えば、連続企業爆破事件においても、ある弁護士は、法廷の自席を離れて拘置所係官に飛びかかり、蹴りつける等の暴行行為に及んでいますし、また沖縄返還協定調印阻止事件においては、弁護士が法廷警備員に体当たりするなどの暴行

を加え、著しく法廷の秩序を乱しています。」

このような説明を読むと、かつては神聖視されてきた法廷にまで、暴力乱用がもちこまれているのである。

これでは、学童の教室が暴力化するのも当然である。私は過激派分子と、一部問題学童との関連について、この辺にも精神の共通した不安な予感を感じるのである。

今日の訴訟や裁判は、確かに一部のものの強引な姿勢が打ち出されていることは、報道機関によつて誰もが見せつけられているところである。所信をもつて行動した限りは、堂々と裁かれて然るべきではないか。といった感がある。

しかしまた所信があればこそ、裁判であろうと、何であらうとたたかきけるのだというのかも知れない。問題はその所信である。

こうした意味で、相容れないイデオロギーの衝突は、どうしようもないというのが、現代のあらゆる分野における本音なのかもしれない。

もともと裁判制度を認めない過激派にと

つては、おとなしく随順することはありえない。厳正たるべき法廷が、こうして乱入されるといふことは、まさしく法の侮辱であり、侵犯である。

これではどこに法の基本があり、確立があるであらうか。

刑事局のパンフレットは、この点について、

「過激派の被告人等は、一部の弁護士と意志を通じて、自己の勝手な要求を裁判所に押しつけたり、裁判を遅らせるために、この制度を逆手にとって、弁護士不出頭、退廷、辞任等を繰り返しているのです。」

これをやられると、裁判所には打つ手がなく、被告人等の意のままに法廷がふりまわされてしまうわけで、この方法で裁判が大幅に遅れているのです。

人権を保障するための憲法や、訴訟法の規定が悪用されて、現行基盤による法秩序の維持の基本となる適正な裁判の実現がはばまれていゐるわけです。」

と、慨嘆している。

こうした真相が、いったいどれほど一般

国民に伝わっているであらうか。もつともそのためにこそ用意された特別法案は、制定されようとする必要性に先立って、その都度必要性和理論だけが、常に国民全般に流され、これに対抗する弁護士会の紛砕しようとする意図が周知されすぎた。

司法の反動化とか、ファシズムの危険とか、右傾化の危険などと、日弁連が全会一致でこの法案成立をばむ理由は、国民大衆には諒解できなかった。

まして、極めて一部にしろ、過激派被告に組し、法廷で暴行をすらし働くという会員の処置さえ、話題にもならないということに、むしろ納得できないものがあつた。

「被告人らは、特定の弁護士のみを私選し、そのため裁判は月一回、半日程度しか開くことができません。」

裁判が開かれても、被告人と弁護士がともども裁判長の訴訟指揮に従わず、事件の審理とは無関係の政治的意見の表明等を行う事例もあり、裁判はますます遅れるばかりであります。

この上もし弁護人の不出頭、退廷、辞任などが繰り返されることになれば、成田

事件の裁判は完全にまひしてしまふでしょう。」

このように説明されてみても、伺いたいののは国民側である。

正直者が馬鹿をみるということが、厳正な法廷にまで侵入し始めたとなれば、いたい健全な国民はどうすればよいのであらう。

こんな状態が続けば、第二、第三のちがつた過激派がでなければよいという気になる。強行手段で思いきつた一掃策がとられないだらうかという、焦りか国民の大半に起つているのが現状ではないだらうか。

安田講堂事件にせよ、浅間山荘事件にせよ、企業爆破にせよ、そしてまた今回の成田空港事件にせよ、その理由とか、論理とかは普通一般国民には問題ではない。

こんな極端な暴動に、堪えられないという感情だけである。

過激な暴動が、遠慮会釈なく、白昼天下御免で堂々と行われることの非情が、たまらないのである。

どこに治安があり、法治があるのだらうという、極めて素朴な疑問と、不安と、驚

きと、憤りが、普通の国民大衆の心情をゆさぶる事実をどう考えるかということだけである。

彼等が主張し、一枚看板のように提唱する平和とか、自由とは、こうした凶悪非道な暴動の後でなければありえないのだろうか。

不安から不信へ、そして起るべきことへの危機を、何とかして正常化されねばならない。倫理も、哲学も、宗教も、もはや何らの力も、かわりも遮断されてしまったのであろうか。

私は、法務省事務次官安原美穂氏の好意で、公安調査庁長官山室章氏の講演冊子「過激派の形成とその背景」一冊を贈られた。

一気呵成に直読し、さらに再読を重ね、「むすび」の篇にいたって、われわれ仏教徒への叱咤激励としかうけとれない感情に迫られた。

「形式物理学と弁証法の範囲に押しこめられた哲学や、本来の機能が忘れられて空洞化した宗教も、あらためて見直され

新しい息吹きが与えられる時が、今近づいているのではないだろうか。

発見とは、視点を変えることだともいわれますが、私たちがとりまくすべての状況を固定的、絶対的なものと見ないで、相対的、流動的なものとみること。

そうしながらも虚無に転落しないように、人間の存在を、そしてこの私の実存を根底から支えるものを確実にとらえて保存し続けること。

そのあたりに現代の混沌から脱出する方向があるように、私には思われます。」以上が巻末結びの一文である。

私はこの高著を直読しながら、彼等を過激派分子に陥れた動機や、その過程に、もしもわれわれの教化が何等かの接点をもちえたら、という溜息をおさえることができなかつたのである。

いわゆる過激派運動に入った青年の過程について、その著はいくつかの事例をあげて説明を加えている。そしてその共通点を次のように捉えている。

A、政治的、思想的には無色な家庭に育ち、当初から学生運動に興味を抱いてい

たわけではなく、まともに学問の研究をめざして大学に入学していること。

B、ある具体的な出来事を通して、大学側に對し、不信感をもち、その機会に学生運動の活動家に接近する。

C、その活動家たちの影響で、マルクス主義の文献を読む。

もちろん彼等はプロレタリアートではないのだが、彼等にとって体制側を代表している大学当局への不信感が底流にあるところを読むので、大学＝資本主義国家の権力という線を与えながら、自分たちと大学側との対立を階級闘争の一形態とみるようになる。

D、ある程度、マルクス主義の文献を読んだうえで、革命運動の現実をみると、既成左翼のやり方に失望するようになり、しだいに新左翼の主張に惹かれて、やがて特定のセクトに加わる。

E、新左翼の立場をとる過激派のセクトはどれも比較的活動家の数が少ないので、さまざまの集会に出たり、闘争に参加するうち幹部にされてしまう。

F、セクトの中で幹部としての責任をも

たされるようになると、いよいよ「学習」に励み、その結果しだいに自分の派の主張を合理的、批判的に見ることが困難になって、これを絶対化し、信条化して自ら信奉するとともに構成員に押しつけ、その尺度で他のセクトを批判し排撃するようになる。

G、ついに、自分のセクトの主張が自分の思考、行動の一切、つまり自分の全存在を律するようになって、セクト外の世の中の通常の規範なり、論理なりが通用しなくなる。

こうした共通点を通じて、私はこのことの意義は、単に過激派対策ばかりでなく、仏教の教化活動と、組織化の方法論として、検討してみなければならぬ重要な問題があると考えるのである。

いわゆる新興教団の活発な組織化運動が、まさしくこれらの共通点の上に立脚していることを痛感するではないか。

そしてまた教化の実践は、これらの過程を無視して強力な態勢がとりえないという点も、冷静に反省する必要があると考える。

過激派のこの過程は、彼等の異常性のみではなく、まじめで直率な、深い思考力をもつ一般青少年の可能性でもあるからである。

したがってこの過程において、一步誤れば絶対的、狂信的な過激分子としてぬきざしならぬ境遇に落ちることを、何としても未然に防がねばならない。

いわば、犯罪防止につながるこれらの対策について、仏教の教化がはたして無能なのであるうか、という課題である。

保護司として、教師として、あるいは篤志面接委員として、一部のかかわりはあるとしても、これらの直接役割は要するに事後の問題であって、予防活動的分野は稀薄である。

どうしても積極的な予防対策として、この分野への教化活動の進出が望まれる。逆説すれば幼少からの家庭教育に、いわゆるわれわれの教化が充分にゆきとどいていれば、それだけ大きな予防対策としての活動が功を奏しているのである。

これが私の考えるまず第一の接点である。

したがって、青少年対策としての教化活動は、従来の微温的な薄弱なものから、しかも多様にして混乱の甚だしい価値観と、現代という時代性の分析に立脚した、青少年心理に即応した積極的活動に移行されねばならないことは、いうまでもない。

むしろ虚脱状態にある彼等の精神に、魅力ある迫力をいかにしてもたせるかという方法論なり、その内容については、仏教教義や信仰の解説に先立つて、充分の検討がなされなければならない。

この点についても、既成教団は新興教団に習わねばならないものがあるであろう。

過激派の主張が、どうして彼等に魅力があったのであろうか。

その事例として、いわゆるエリートコースを歩んだ国立大学生のことが紹介されている。

(4)、数学を究めようとする一方、人間とは何なのか。世界とは何か。そして人は如何に生きるべきかを探り出そうとする中で、科学の哲学とも称せられるところの分析哲学、論理実証学派の哲学に接近

したが、ついに「この世界で人は如何に生きるべきか、その社会の中で私の持つ意味は、私自身、如何に生きるべきか、大学へ通い学問することの意味等はつかめず、そして断片的なバラバラな意識の砂の中で、味気なく、また動揺しやすい人生観、世界観を漂うにも似たような虚しさを感じていました。

(四)、自己形成の行き詰り、工学への全般の疑問、生徒として、学生としての長い生活の中で、社会全般とそれの中の自分をつかみ得ないような不安定さの中で、脆弱な自己に対する嫌悪感を抱いていました。

(五)、スト権提案も、私自身の問題としてはとらえられなかつたので、単に賛成するだけであつたのですが、何とか解決を見出そうと思い、サルトルの「実存哲学とは何か」を読み、「アンガジェ」(参加する、保わる)することから一切が始まるのではないかと思うようになりました。状況にかかわることに踏み切り、その中の種々の要因とからみあいながら発展してゆくのであり、まづ踏みきること

を選ばねばならないという考え方が、私自身の思考の閉塞状態に対して十分な力を持ちました。

この引文によつて大体この学生の経過と、精神状態の大綱がつかめると思う。

私はこれらの精神過程について、思考力は一般学生と、何らの相違も見られないと思うのである。

私はこの時点において、よき指導者を得て、考えるべきを考え、選ぶべきを選ん で、冷静になつていたら、少くとも彼の過激派への陥落は、未然に阻止することができたであらうと思うのである。

彼ばかりではない、現代青年の殆んどが、このような精神の空白期を経験するであらう。まことに危険期といわねばならぬ。

この危険は、非行犯罪に、あるいは過激派に陥る可能性を最も多くもっている。

このことは、現代の青少年犯罪の激増がものがたつてゐる。凶悪粗暴犯の傾向や、とくに中、高生の自殺、他殺自件や、暴力教室の実情からみて、私はこの趨勢も、一種の過激派の動向ではないかとさえ考える

のである。

たとえば、シンナー遊びの常習犯である中学生が補導され、「なにもすることがないからシンナーをすつてゐる」と答えている。

この少年の「なにもすることがない」という精神の空白も、また先の過激派に属した大学生の「断片的バラバラな意識の砂の中で、味気なく、また動揺しやすい人生観、世界観を漂うにも似たような虚しさ」と、相異するものがあるであらうか。

私はこうした意味において、非行犯罪に、あるいは過激派学生に陥る青年諸君に、むしろ深い憐れみをさえ感じるのである。

そうした精神の虚しさを感じねばならない彼等の家庭なり、社会なりの不幸な環境に成長せねばならなかつたからである。

この彼等の成長期に対して、仏教教化の第二の接点を考えたのである。

つまり彼等の精神の虚しさを埋めるものとして、また家庭や社会の不幸を、より幸に充足する精神の糧や、その思考の転換的発見のいとぐちとして、仏教が役立たない

と断言できるであらうか。

仏教的思考や、その生活の方策がゆきとどいていたとすれば、彼等が味わった断片的バラバラな意識の砂の中で、味気なかつたり、人生観や、世界観が漂流するようなことは、少くともある程度、あるいは相当な高率で充足できたであらうし、またでかねばならないのではあるまいか。

仏教が彼等の生活に浸透し、その家庭に生き、その環境を潤化しておれば、少くとも彼等の理由に基く過激派への進出は、防止できなかったであらうか。

さらに過激派学生の経過の中で、山室章氏は次のように続けている。

「あれこれの行動中、集団の中ですから当然ともいえましようが、冷静さを失つて違法行為に出て逮捕される。逮捕拘留されると、面会や印刷物の差入れなど種々のセクトからの働きかけがありまして、一層勉強させられることになりました。」

何しろ逮捕された敗北感と、逮捕した相手の機動隊への憎悪感で一杯の時ですから、やがて憎悪の対象は機動隊から、そ

れを入れた大学当局、さらに文部省、政府という形で発展してゆきます。

こうした未決拘留中から保釈後、マルクス主義の文献に親しむようになり、一体どのセクトがどんな主張をしているのだろうかという興味から、偶然見かけたポスターによつて、あるセクトの集会に出て、オルグされ、しだいに深入りし幹部となり、やがて合理的、批判的精神を失い、セクトの方針、上級幹部の指示を絶対化して、何の疑念も抱かないで服従するようになります」

こうした経緯の行程で感じることがは、「逮捕拘留されますと、面会や印刷物の差入れなど、種々のセクトからの働きかけがありまして、一層勉強させられることになりました」という点である。つまり機を捉えたセクト側の積極的な、むしろ攻勢的で、追い撃ち的なアフターケアーである。

いわゆる洗脳の絶対機としてこの時機を逃さない方策について、われわれは学ばねばならないものがある。

入院を希望し、求道の信者にさえ、現代の寺院はどれだけの熱意と、その準備対策

があるであらうか。われわれの教団自体この点については、熱狂的な新興教団に見習わねばならないものがある。

強引な、そして強制的な彼等の信者獲得策と冷視した既成教団は、はたして慈悲救済の実をあげ得たであらうか。

少くとも入信者本位の従来の文書伝道から、未信者対象の方策に、いまや万全を期さねばならなくなった。

うら若いキリスト伝道者が、伝道書の数冊を持って、堂々と寺院を往訪すること、あなたがナンセンス視してよいのであらうか。

熱心な仏教信者の古老が「お寺の和尚さんが、クリスマスケーキを買う時代になりました」と語ったことばを思いだすのである。

青年層の心のむなしさが求めるものは、あなたが深い哲理でも、また秀れた論理でもなく、自らを律する仏教徒の厳しい態度ではなからうか。物質偏重の後遺症が、さまざまな社会の様相のもとに過激にかりたてる条件が備わりすぎたのである。

家族制度の廃止とともに、廃止してはな

らない家族関係を、誰が思うままに廃棄させたのであろうか。

自由という民主制の美名のもとに、その方向をどうしてエゴに帰結せしめたのであろうか。共存共栄の社会理念は、各自に分散した個の群集でしかなかった。

個人のエゴは集団のエゴに、地域のエゴから、種別のエゴに、それらの葛藤が増大してまさに群雄割拠の再現である。願共諸衆生の理念は、永遠の理想でなければならぬい立場を、厳格に把握し直さねばならない。国家を破壊し、文化の革命を行って、はたして是に代るよりよき新生国家であるであらうか。

破壊するものも人間であり、革命するものも同じ人間であることの基本を忘れてはならない。

要はその人間自体の発見であり、人間自体への研究である。その人間の自覚にもとづく覚他の仏道実践こそ、現代人を救う大道であることを、現代即応の態勢において、創意工夫する自他平等界を第三の教化接点として挺身しなければならぬと考えるのである。

われわれが仏教によつて育成し、仏教によつて実をあげようとする福祉社会は、過激者によつて壊されるものであつてはならない。また彼等を出させるものでもない。だからこそ仏教教化の接触と、その浸透によつてこそ、達成されねばならない。

福祉社会の構成は、僧伽の精神を基調として形成されるがゆえにこそ、相互扶助による理想的な衆生縁の集団生活である。自利々他の衆団生活は、互譲の精神によつて、平等であり、偏重な福祉社会ではない。

現代社会における過激群のさまざまな現象は、仏教と隔絶し、離反せるがゆえに生

じた結果であることを、あえて考え、精神の空洞がいかに危険であるかを、改めて見直すために、現代社会の事例として過激派問題を考えたのである。

そしてこの事例によつて、仏教に根ざした社会福祉の使命と、それへの要請をもたらしことができればとの願いのほかにはない。

いよいよ仏教が新しく見直され、ますます時代がこれを要請し、そして人心は仏教の社会福祉によつてこそ、真の安寧を得ることであらう。

このゆえにこそ「仏教福祉」の充実発展の意義があり、またその期待が大きいのである。

仏教福祉考

高 橋 憲 昭

(大谷大学助教授)

以前から数回にわたり、折角、執筆の機会を与えられていながら、今日までそれに

おこたえできずにいた。それは、毎日の仕事が多忙であるということにもよるが、実